La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 第290号　　2018年11月6日発行

発行：名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro

461-0004 名古屋市東区葵一丁目26-10ユニーブル新栄301号

公式サイト　http://nagoya-esperanto.a.la9.jp/

Facebookページ　https://www.facebook.com/nagoja.esperanto

郵便振替口座 00840-8-40765 「名古屋エスペラントセンター」

日韓共同開催エスペラント大会サロンにて

目次

大橋康二さんの蔵書（石川一也）.....2

内海堅志さんのこと（山田義）.....5

山田義さん、エスペラント図書館を訪問する（新田隆充）.....6

NEC八ヶ岳交流会の報告（前田可一）.....9

第２回日韓共同開催エスペラント大会報告（鈴木善彦）.....11

エスペラント入門講座の報告（山口眞一）.....12

Vergara氏講演会の報告（山口眞一）.....13

「竹﨑睦子基金」の活用募集.....15

今後の地区の予定・活動日誌.....16

会員近況・編集後記.....17

ザメンホフ祭案内.....18

大橋康二さんの蔵書

石川一也（掛川市）

わたしと大橋康二さんはすぐ近くで生まれ、わたしが掛川西高校の生物部に入部すると、当時３年生の部長が大橋さんという、そもそもが何か縁があるような関係でした。

大橋さんは生徒会の大会でも活発に意見を述べる生徒でした。学校の図書館の本を借りようとして、貸し出しカードを見ると、わたしが借りたいと思う図書は全て大橋さんの名前が既に書いてあるという状態でした。図書館での記憶です。大橋さんは卒業後、静岡大学の工学部に進学しました。わたしも行きたかったのですが、能力的に無理でしたので、同じ静岡大学の教育学部に進学しました。大橋さんはその後、就職され精密機械関係の仕事をされました。

エスペラントとの出会いについて記しておきます。大橋さんは中学生のとき尾沢緑という先生にエスペラントを教わったそうです。わたしも同じ中学校にいたわけですが、その先生のことは覚えていません。こういうわけで、わたしがエスペラントを始めたきっかけは、大橋さんの影響かと思われがちですが、それはまったく違います。

わたしが静大２年生の春、３月のことでした。静岡市を歩いて大学に行きますがその通学路に電柱の張り紙をみつけました。それには、「来る３月〇〇日、産業会館で静岡県エスペラント連盟の結成式があります。ご出席ください」と書いてありました。当時わたしはエスペラントとは何かも知りませんでしたが、どういう訳か当時のわたしには何の関係もない「静岡県エスペラント連盟の結成式」に出席したのです。ここのところが不思議で「謎」なのですが、「掛川—静岡」間の定期券があったので、春休みでひまであったことがその行動の理由ではあったのですが、とにかく会場に行くと、高杉一郎さんが壇上で話をされているところでした。その時には、高杉さんというより教授の小川五郎先生がこんなところで話をしているのです（小川五郎教授は高杉一郎というペンネームを持っておられました）。

話を聞いているうちに、次第にエスペラントのことが分ってきて、すっかり引き込まれてしまいました。そのあと、小六の女の子が、小学６年生用の国語の教科書に載っていた「ザメンホフ伝」を朗読しました。それを聞いて一層興味を持ったのです。そこで、わたしは入口で売っていた小坂狷二（1888-1969）の『エスペラント捷径』を買って帰りました。早速読み始めたら、英語にくらべてとても易しいので、「これなら自分にもものにできる」と思って、熱心に読みました。しかし、歌があるページまで来たところ、急に難しくなってそこで止めてしまったのを覚えています。

この話を、いつも一緒に通学している友人に話したらしく、ある日、彼が新聞片手に自転車で30分をかけて我が家まで来てくれました。「君の言っていたエスペラントとかいうものの講習会が静岡であるって書いてあるぞ」というのです。わたしは、静岡市の葵文庫という図書館でそれから毎晩１時間、「エスペラント初級講習会」を受講しました。講習会は10日間続きました。講師は、はじめは図書館の飯塚伝太郎氏でしたが、すぐ栗田公明さんに交代しました。最終日には５人の講習生が残り（40人ほどで始まったのですが）、あるときそこへ、高杉さんがオーストラリアの青年を連れて来ました。講師の栗田さんが、「誰かエスペラントで彼に質問して」というので、わたしが質問しました。Ĉu via lando havas kinejon?（貴国に映画館ありや？）というバカバカしい質問でしたが。

こうしてわたしのエスペラントとの関わりが始まったわけですが、ある日、浜松市のエスペラントの集まりに出席したところ、大橋康二さんもそこに居てお互いにびっくり。「えっ、君も？」ということで、かつては高校時代生物部で先輩後輩だった二人の奇妙な再会となったのです。静岡県エスペラント連盟の結成式になぜ出席したのかという「謎」を解明すべく、大橋さんに「生物部での１年間にエスペラントのことをぼくに話しましたか？」と尋ねてみました。すると、「学校では当時いっさいエスペラントのことは話さなかったよ」という返事でした。というわけで、わたしのその「謎」は、まだ「謎」のままとなっています。

その後、大橋さんは精密工業関係に就職され東京に住みました。お互いに仕事が忙しく交流はなかったのですが、わたしが退職してから、掛川市でエスペラントを教えて、浜松エスペラント会の会合にもしばしば出席するようになったとき、１、２度は会ったように覚えています。大橋さんとの交流はほとんどありませんでした。

ところが、ここ数年前から大橋さんは、わたしの発行する『掛川エスペラント便り』や “Raporto de renkontiĝo Kakegawa” にほぼ毎回長文のメール投稿を下さるようになりました。そのうちに、「いつ死ぬかわからないが、ぼくのエスペラント関係の本・雑誌やそのほかのものは、全て捨てられてしまうと考えると、今のうちにこれらを有効に活用してもらうように考えなければならない」というようなことをメールに書いてこられました。ところがそんな頃、数か月前に展示会の受け付けで、突然倒れ、救急車で運ばれるという騒ぎがあったそうです。それまで、そうは言ってもまだまだ元気だし先の話だと思っていたのが、急に現実的になった、と言うのです。

そこで、わたしも大橋さんの気持ちは十分理解できるし、自分自身のことでもあるので、たくさんの蔵書の活用を考えることに協力する気持ちになりました。ずっと以前から、図書館などに寄贈ということも考えていたようですが、適当なところがなく、そのままになっていたのです。まずわたしが考えたのは、「八ヶ

岳エスペラント館へ送るのはどうだろうか」ということでした。エスペラント館に置いて宿泊者に自由に持ち帰ってもらうのはどうだろうか、と考えたのです。運営委員にもそのことを伝えたのですが、返事がないままでした。そこでとにかく、掛川エスペラント会の会員、特に掛川レンコンティージョへ出席している人たちに配布することから始めようということになりました。

まず、掛川エスペラント会の鈴木祥平さんとふたりして２台の車で大橋さん宅へ伺い、小さい段ボール箱ではあったのですが10箱ほど自分たちの家に運びました。そして、あるレンコンティージョの当日、わたしの家の車庫に卓球台を広げ本を並べて、あるいは積み重ねて、出席者に欲しい本を持ち帰ってもらうようにしました。一人平均５冊で８人ほどでしたから、50冊程度は持って行っていただきました。

しかし、まだまだたくさん残ったので、メールで掛川エスペラント会のみなさんに、送料は受取人負担で希望の本を送る、と書き、わたしが在庫の本を番号付きで紹介しました。すると、10人ほどから、それぞれ２冊から10冊の注文があり、送本しました。その後、それを読んだ名古屋エスペラントセンターの蔵書担当の山田義さんより、「センターで残りの本・雑誌を受け取ってもよい」という嬉しい連絡が来て、渡りに船とばかり、残りのものを小さな段ボール８箱ほど宅急便で送りました。

大橋さんのエスペラント関係の蔵書には、非常に古い本もたくさんあり、これらは、おそらく大橋さんが古本屋を覗いて見つけたものだろうと思われます。中には、アメリカなど海外出張の折に見つけたものも含まれていました。

定期刊行のエスペラント雑誌は、UEA の Esperanto 誌、El Popola Ĉinio 誌、Monato 誌、La KancerKliniko 誌、Hungara Vivo 誌、など海外のもの、国内の R.O. 誌、La Movado 誌、La Verda Sanatorio 誌、La Nova Vojo 誌、MEM の機関誌、など多数が保存されていました。

名古屋エスペラントセンターへ寄贈された大橋蔵書

内海堅志さんのこと

山田義

6月に内海さんという方からセンターにメールが入った。

初めまして。名古屋市内在住の内海と申します。
目下、終活中で、La Revuo Orienta をどうしたものか迷っており、もしもお役に立つようなら、ご指定の日時に持参したいと思います。

La Revuo Orienta 1952年7月号～1958年6月号の寄贈の申し出であり、蔵書担当の私がセンターで受け取ることにした。しかし、時間が合わず、その日センターのドアのところに包が置いてあったの見つけ贈呈を受け取った。置き去った紙袋を見つけたことをメールでお知らせし、せっかくだから日をあらためて会いましょうということにした。

その後のメールで、内海さんは La Revuo Orienta を購読していた時は伊勢の支部にいらしゃったことが分かった。今は瑞穂区にお住まいの方である。

日を決めてセンターで、私が図書の整理をしている間にお迎えできた。エスペラントを知っている人というだけで、こうして初対面でも、昔からの知り合いのように談笑できた。お互いに年齢を明かすと内海さんは数歳上であることが分かった。

センターの存在はネットで知り連絡をして来たとのことだが、色々とお話ができた。私の出版したエスペラントの歌集に興味を持ってくださった。親族にピアノの教師がいらっしゃるそうである。

「センター通信」の最近号を差し上げたあと、スマホの自動シャッターをセットして、二人で本棚の前に立ったのがこの写真である。その後、「終活の身ではありますが、名古屋エスペラントセンターのお役に立つことがありましたら、なんなりとお申し付けください。みなさまには、なにとぞよろしくお伝えくださるようお願いします」というご丁寧なメールをいただいた。

内海さんは手元にはモバイルデバイスとバッテリーつき Wi-Fi 装置を携帯しており、ネットを開いて見せてくださった。エスペラントの字上符などのことが語られ、Kajero という、日本語、韓国語、エスペラント対応テキストエディタのソフトを紹介してくださったりで、「パソコンに詳しい人」と見た。システムについても相談に乗ってもらえるとのことであった。

山田義さん、エスペラント図書館を訪問する

Sinjoro Jamada vizitis La Esperanto-Bibliotekon en Ŝimonoseki

新田隆充（Nitta Takamichi）
エスペラント図書館代表（山口県下関市）

山田さんから、エスペラント図書館を訪問するにあたり、梅光学院大学を表敬訪問したいとの申し出があったのは訪問の５日前、10月18日のことだった。

具体的な内容は、学内に設置されているキリスト教教育センターを訪問したいということ、そして英国聖書協会発行のエスペラント訳聖書『La Sankta Biblio』と1883年（明治16年）に米国聖書会社が発行した『訓點・舊約全書上編、下編』を梅光学院大学の附属図書館に寄贈したいという２点であった。

梅光学院大学は、エスペラント図書館も加入する市民団体「結いの会（梅光学院大学梅ケ峠キャンパス利用者協議会）」と協定を結び、10年間利用されていなかった梅ケ峠キャンパスの利用が可能となった。梅ケ峠キャンパスは現在市民の文化芸術活動のために利用されている。また、あまり知られていないが、小坂賞第１回受賞者である野原休一（1971年長門市三隅町出身、1948年下関市長府没）は市内の豊浦中学校（現豊浦高校）に勤めたのち、この大学の前身である梅光女学院に勤めていた。

山田さんからの申し出を伝えたところ、冨田一恵館長からは驚きと歓迎の返事が返ってきた。冨田さんによれば、『訓點・舊約全書』は日本国内の大学でも所蔵しているところが少なく貴重とのことであった。「エスペラント訳はそちらのエスペラント図書館でよいのでは？」との質問は確かにもっともに思われたが、今回は梅光学院大学が梅ケ峠キャンパスを市民に開放し、そのなかでエスペラント図書館が設立できたことに対する感謝を込めての表敬訪問であること、そして梅光学院大学にはかつて野原休一というエスペラントの世界でも大変重要な仕事をなした先生が教鞭をとっておられ、野原休一が梅光にゆかりの深いバージニア マーガレット マッケンジー（Virginia Margaret Mackenzie）にエスペラント語を教え、マッケンジーからテニスを教わったこともあると伝えられているため、附属図書館にエスペラント語の聖書があってもご迷惑にならないはずと説明した。『60年史』と『100年史』にかなりのページを割いた豊浦高校と違い、梅光での野原休一が語り継がれている様子はなかったが、今回図書館長の冨田さんにこのような形で野原休一のことも紹介する機会を得ることができたのは大変よか

った。礼拝のために多忙であるはずの李光赫（イ　グァンヒョク）キリスト教教育センター長との面会も決まった。

訪問日当日、山田さんとは下関駅で合流し、車の中で話しながら梅光に向かった。最初に面会したのは李光赫センター長。寄贈文献のこと、エスペラント語のこと、そして山田さんについて話をしたあと、礼拝の準備をおこなっているホールを案内してもらった。李光赫さんから思いがけない提案があったのはこのときだった。「これは大変貴重なものなので、学長が受け取る形での贈呈式をしたほうがいいと思います。」こうして急遽贈呈式の開催が決まった。

山田さんと自分は最前列に座って礼拝に参加した。後ろの席には樋口紀子学長がいたので、自分は山田さんの訪問と今回の聖書の贈呈について説明した。礼拝は『主がそばにいるから』という歌を日本語と韓国語の２言語で歌うというものであった。礼拝のなかで李光赫さんは「いろいろなことばで賛美しましょう」と言った。礼拝の終盤、山田さんが壇上に呼ばれ、贈呈式がはじまった。挨拶をうながされた山田さんは「エスペラント語、ご存じだと思います。世界共通語、100年ほど前にできたことばですけれども、ここに旧約聖書と新約聖書の『La Sankta Biblio』、これをみなさんにお贈りしたいと思いこれをお持ちしました。エスペラントで御言葉を紹介いたします。短い御言葉です。それは、Amu vian proksimulon kiel vin mem、あなたを愛するように、あなたの隣を愛せよ、Amu vian proksimulon kiel vin mem、これがエスペラントの聖書の中の一句です」と話したあと、樋口紀子学長に寄贈文献３点を手渡された。朗々と話す山田さんの姿は、まるで劇をみているようだった。式が終わると山田さん、樋口さん、冨田さんの３人は本をめくりながら話をし、そこから冨田さんに附属図書館を案内してもらえることになった。

エスペラント図書館の事務室のドア前で

梅光学院大学をあとにして、車のなかでは山田さんとさまざまな話ができた。それは名古屋エスペラントセンターでの蔵書管理の方針をめぐ

る考え方、山田さんがエスペラントを学びはじめ、同じ高校で、大本の信徒でエスペラントを学んでいる仲間をみつけたこと、エスペラント語の音声を聴く機会がなかった時代にイタリア語の歌曲を参考にしたこと、壇上の小西岳の選ぶことばとその話しっぷりの美しさに感動したことなど。

Facebookの投稿から厳しい人柄を想像していた私は、山田さんのウイットに富んだ語り口に少し驚いた。川棚温泉の「瓦そば・たかせ」で食事をして、自分の家に寄ってからエスペラント図書館へ案内した。事務室兼応接室で袋から取り出してお見せしたのが、1906年に発行された貴重な文献や、ポーランド大統領府から贈られた特別装丁本などであった、蔵書棚のある部屋を案内した。初めて目にするものもあったようだった。森真吾さんの資料がきれいに整理してあり、その整理を森さんご自身が行ったことについては、山田さんも驚いておられた。

帰宅後の山田さんから送られたメールには「エスペラント図書館サミットをしましょう」と書かれていた。夢のような話だ。実現できたらどれだけ素晴らしいだろう。

エスペラント訳聖書の贈呈

NEC八ヶ岳交流会の報告

NEC en Jacugatake

前田可一

2018年9月9日(日)~9月10日(月)に八ヶ岳エスペラント館で講師に山梨エスペラント会の引田秋生さんを迎え開催された。合計7人の参加があった。

9月9日(日)

1．エストニア人エスペランチスト　Lydia　LindlaさんとのSkypeによる交流では、タブレットをプロジェクターにつないでスクリーンに大きく映し出して交信した。日本の15時、エストニアの9時がかねてから打ち合わせてあった。こちらから参加者の自己紹介、そのの後できちんとドレスアップした彼女が画面に現れ、月2回3人グループでエスペラント活動を継続していること、今年の夏はエストニアでも30度を越える暑さとなりきつかったこと等の話題で語り合った。

2．引田秋生さんの講演「私のエスペラント人生」では、講師の海外でのエスペラント体験のPDFファイルがスクリーンに映し出され特に海南島でのエスペラント漬けといっていい体験記は印象深いものがあった。また、定年後本格的にエスペラントに取り組んだ講師の苦闘と努力には改めて刺激をうけた。講師の東北大会でのエロシェンコの記念出版には、エロシェンコからエスペラントに入り、現役時代を上回る労力を注ぎその完成に至ったこと、その原動力が講師の盲学校教師としての経験と結びついていることに感銘をうけた。

3. 名古屋エスペラントセンターの読書会“Ni Legu”で読んでいる“Homoj de Putin”のなかから‘Renat kaj Galina’の章を読む八ヶ岳版を行った。ソ連解体後の90年代の混乱期を経てプーチンが登場し現在に至るロシア人の意識の変化ををフィンランド人ジャーナリストKalle Kniiviläがロシア市民へのインタビュー形式で追ったドキュメンタリー。

4. Kune Kantu! “La Vivo en Roz’” (La Vie en Rose) の Claude Piron 訳付のYouTubeをスクリーンに映し出しみんなで唱和した。次いで長崎の鐘のギター伴奏を流し唱和した。また、YouTube上にある各々が推薦するエスペラントの曲をスクリーンに映し出して鑑賞した。

9月10日(月) 遠足天女山ハイキング

小雨のぱらつくなか湯浅典久さんの引率により天女山ハイキングを実施した。ひさしぶりのハイキングで距離は短かったものの心地よい汗が噴出した。山々の景色はみえなかったが、アザミ等の野の草花と森林浴を楽しむことができた。

生憎の小雨交じりの2日間で、八ヶ岳の雄大な自然を楽しむことはできなかったのは残念だったがプログラムのそれぞれが楽しく熱心に取り組まれた。エスペラント館を閉じてから、帰り道にサントリー白州蒸留所のBAR白州やウイスキー博物館、ファクトリーショップを回って場内を自由見学した。企画と実行の担当者は名古屋エスペラントセンターの前田可一と山田義。

男性ばかりだがみんなで自炊もカレーライスを作って楽しんだ。

第２回日韓共同開催エスペラント大会報告

鈴木善彦（SOJO）

今年の日本エスペラント大会は2011年以来7年ぶりの日本・韓国共同開催の大会でした。日本は第105回、韓国は第50回の記念の年です。

10月12日（金）から14日（日）の3日間、奈良市にある奈良県文化会館で開催されました。文化会館は興福寺の北、奈良県庁の西隣で、奈良市の中心地に位置し、近鉄奈良駅から徒歩5分ほどにあり、会場としては大変良い場所でした。

NEC(名古屋エスペラントセンター)としては1昨年、昨年の大会に続き、サロンに出店、テーブル１脚を借り、センターの出版物を中心に、他のリブロセルボにはないと思われるSTAFETOの本や山口氏提供のエスペラントグッズとしてロゴ入りボールペンなどを並べました。また、両隣のブースはSkolta Esperanto-ligo Japana とJapana Budhisma Ligo Esperantistaであり、それぞれの責任者が堀田、山口でどちらもセンターの委員のため店番を協力し合いながら行いました。

12日のInterkona Vesperoではサロンの出店者や翌日からの分科会などの案内・説明の時間が与えられ、NECからは鈴木がSalono2のBudoへの誘いをのべた後で、堀田がNECへの支援を呼びかけました。

13日は10時から開会式が国際ホールで開かれました。参加国別の紹介・起立が行われ、日本人と韓国人が多数を占めたのはもちろんですが、例年より多くの国からの参加者があったように思われました。

同ホールでは午後から公開番組として、千田稔氏の「日本における仏教文化の成立」、金文京氏による「『三国志』からみる東アジア現代国際情勢」の講演が開かれ、奈良市での開催、日韓共同開催にふさわしい内容でした。

参加者数は受付で配布されたKongreslibroではJ427、K077まででしたが、14日の閉会式での大会実行委員長（木元さん）の発表では556人とのことでした。日韓ともに来年の開催地（開催団体）から招待スピーチがありました。日本は埼玉県で開かれるとのこと、参加できる方はぜひ予定してください。

今年はサロンの出店者にAmrilato de SukeraSparoがあり、大会の参加者全員に１枚ずつ配布された、食べ物の材料が描かれたエスペラントカード（いつかのメモラージョ）を数人で協力して集め、料理を作るゲームが大会期間中おこなわれました。センターのブースでも「faruno」カードを置く場を提供するなど、ゲームの進行に協力しました。ゲームの認知度が上がれば、エスペラントの大会でより多くの人がゲームに参加し、より楽しく知り合いになれるよい機会となるでしょう。

エスペラント入門講座の報告

山口眞一

時　　9月23日(日)午後2時から6時、10月21日（日）　午後2時から6時
所　　名古屋エスペラントセンター

8月に開催した「愛知サマーセミナー」（前号参照）でエスペラント講座を受講した高校生のうち数人が、「今後も続けて学びたい」と答えてくれました。そのうち、講習会形式での学習を希望した二人の高校生に案内を送り、結果として一人の高校生と二人の大人を対象として入門講座を実施しました。テキストは『ドリル式エスペラント入門』を使用しました。

第一回は9月23日。高校生のほうは、残念なことに「日時を間違えていた（！）」と欠席。山口が講師をつとめ、水谷章子さんが受講。すでに学習経験があるので、テキストの半分までを終えることができました。片山浩子さんが見学。

第2回は9月30日の予定でしたが、台風のために急遽延期とし、10月21日となりました。高校生のほうは富永さんといい、現在2年生女子。サマーセミナーでエスペラントの概略は知ってもらっていましたが、学習ははじめてですので、片山浩子さんに講師をつとめてもらい、山口は水谷さんご夫妻（御夫君も学習経験あり）を担当してテキストの残り半分をすすめていきました。（二クラスを並行開催）

富永さんは4時間で全体の5分の1程度までを終了。水谷さんは全体の5分の3程度まで。このテキストは独習でも可能なように作られていますので、残りは自学ですすめてもらい、不明な点は講師が随時フォローすることとしました。富永さんは「とてもおもしろかった」と感想をのべてくれました。ただ、高校の勉強や受験もあるので、今後は急がずマイペースで学んでいただければ、と思っています。

Vergara氏講演会の報告

山口眞一

時　　10月23日(火)午後6時半から7時半
所　　名古屋エスペラントセンター

チリのエスペランチスト José Antonio Vergara氏が、日韓エスペラント大会のために訪日し、その後日本各地を回って交流をはかる予定であることを知り、「ぜひ名古屋にも」と要望していたところ、折よくタイミングがあって、招待することができました。

Vergara氏は58歳の精力的エスペランチストで、世界エスペラント協会の幹部会員（estrarano）を二期（2007-10/2013-16）務めています。本業は医師で、専門は疫学および公衆衛生学です。日韓大会でもエスペラント運動が言語問題の解決において果す役割についての講演をしていますが、今回名古屋エスペラントセンター主催の講演会としては、演題を「La Lando Ĉilio, ĝiaj nunaj problemoj」としました。これは、チリという国が日本人にはそれほど実態がよく知られていない（南北に細長いとか、ピノチェトのクーデターとか、チリワインとかのような断片的知識しか持っていない）ことに鑑み、もう少し詳しい情報を聞き取りたいという意向に基づいたものです。

氏の淀みない明快なエスペラントもさることながら、講演内容も簡潔にして要を得たもので、1時間という限られた時間の中で、チリという国が現在抱える経済的・社会的問題について、聴講者はおおよそのイメージを掴むことができたのではないか、と思います。氏は盛んに“sovaĝa kapitalismo”（野蛮な資本主義）というキーワードで、新自由主義の問題点を挙げていきました。これはチリに限らず、日本も含む先進国でも同じことが言えるのだろうと思います。氏は若い頃“komunisto”であったとのことですが、その問題点に気付き、現在は自らを“humanisto”と認識しているそうです。

講演会には10人が聴講（Vergara夫妻を含めて12人）し、その後近くの居酒屋で会食、懇談が続きました。名古屋にはごく短時間の滞在でしたが、充実した交流の時が持てたと思います。

この後、氏は恵那の藤本日出子さん宅に宿泊し、その後は帰国の途につきました。

☞ prelegas José

Nagase donacas "Tempo"n, eldonaĵon de NEC al José ☞

☞ poste komuna fotado

Kiel kutime (?) partoprenantoj drinkas ☞

「竹﨑睦子基金」の活用募集

名古屋市を中心に永年エスペラント運動に献身された竹崎睦子さんのご遺族から、「東海地方のエスペラント運動のためにお使いください」と遺産の一部が寄贈されたものを、2017年5月より「竹崎睦子基金」として管理・活用しております。

今までに、第66回東海エスペラント大会や Zamenhofa Festo 2017 に費用の一部を援助、名古屋で開かれた、愛知県国際交流協会主催の「ワールド・コラボ・フェスタ2017」への参加費やエスペラントの広報費のために支出、名古屋の公共図書館に La Revuo Orienta を年間寄贈しました。

今後も援助を続けたく思いますので、趣旨に副う活動をしようとする団体または個人は、下記の要領で管理人まで文書で申し出て基金を活用してください。

記

対象：東海地方のエスペラントの運動に寄与する事業（＊）を行う団体および個人とします。

応募要領：事業の時期、目的、内容、予算概要、東海地方のエスペラント運動に寄与する理由などを付記して管理者に申し出てください。

支援決定通知：申し出の受領から１か月以内に、可否および支援金額などを管理者から通知するとともに公表します。

事後の報告義務：事業の終了後３か月以内に事業経緯と内容を報告してください。（管理者がエスペラント運動誌などにその事業概要を公表することがあります。）

（＊）事業とは、例えば次のようなものをいいます。
エスペラントの大会、講習会、広報活動、出版および外国からのエスペランチストの招致、外国で行われるエスペラント大会などへの参加、エスペラントのための旅行などです。

「竹崎睦子基金」管理者：

黒柳吉隆 salikojp@ybb.ne.jp
後藤好美 yosimi51@mf.ccnw.ne.jp
山田　義 yamadapiano@mac.com

今後の地区の予定

ワールド・コラボ・フェスタ2018

11月10日(土)から11日(日)。10時から17時。オアシス21「銀河の広場」にて
中部地区最大の国際交流イベント。
NECのブースを設けて、エスペラントの案内をします。
東京からアレクサンドラ綿貫さんが応援に来て下さいます。

ザメンホフ祭

最終ページに案内あり

活動日誌（8月から11月）

8/24（金）	17時半~19時半	初級講習会
8/29（水）	16時~18時	読書会
9/7（金）	11時~15時	蔵書整理
9/7（金）	17時半~19時半	初級講習会
9/19（水）	16時~18時	読書会
9/21（金）	11時~15時	蔵書整理
9/21（金）	17時半~19時半	初級講習会
9/23（日）	14時~18時	入門講座1
9/26（水）	18時~20時	センター委員会
10/5（金）	11時~15時	蔵書整理
10/5（金）	17時半~19時半	初級講習会
10/19（金）	11時~15時	蔵書整理
10/19（金）	17時半~19時半	初級講習会
10/21（日）	14時~18時	入門講習2
10/23（火）	18時半~20時	講演会（José Antonio Vergara）
10/31（水）	16時~18時	読書会
11/2（金）	11時~15時	蔵書整理
11/2（金）	17時半~19時半	初級講習会
11/6（火）	17時~20時	「センター通信」発送作業 およびセンター委員会

会員近況

2018年10月24日から26日まで３回にわたって中日新聞及び東京新聞の生活面に、伊藤俊彦・順子夫妻が主宰されている「元気のでる学習塾」に関する記事が掲載されました。これについて、伊藤さんより下記のコメントをいただきました。

★

当初、私たちは伊藤順子作の絵本『しっぽがわらう』（三五館シンシャ、2018年）を中日新聞で取り上げてもらいたいと思い、旧知の記者に声をかけました。ところが、取材しているうちに、彼女はむしろ私たちが岩倉市で開いている「元気のでる学習塾」に大きな関心を寄せるようになり、４回に及ぶ綿密な取材を受けました。

そして、生活面の「ともに」の欄に「詰め込まない学習塾」と題して、塾の現況、開塾に至った経緯、通ってくる子どもたちの様子などを解説する記事が掲載されました。各回のサブタイトルは次のとおりです。上「口を出さず自発性育む」、中「息子の死を胸に抱え開塾」、下「よりよく生きる土台を」。

率直に言って、私たちの学習塾はごくささやかなものにすぎず、３回も掲載していただいたことは望外の喜びですが、戸惑いも覚えています。また、取材中にはエスペラントのこともずいぶん話題になったのですが、記事になった時点で最終的にはすべてカットされました。それがちょっと残念ですが、本筋に関わりがないということで、やむを得ないでしょうか。

なお、この記事はネット上にも掲載されています。

http://www.chunichi.co.jp/article/living/life/CK2018102402000002.html
http://www.chunichi.co.jp/article/living/life/CK2018102502000005.html
http://www.chunichi.co.jp/article/living/life/CK2018102602000004.html

▶編集後記

○第290号をお送りいたします。先号からの連載予定の”Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo”は予定の原稿が間に合わず、今回はお休みとさせていただきます。謹んでお詫びいたします。次号からをご期待ください。(猪飼)

センターの会員（維持員）募集中

A:月500円 ／ B:月1,000円 ／ C:月2,000円 ／ D:月3,000円

ランクによる会員資格に差はありません。ランク別及び振込月数を明記して郵便振込（口座番号は表紙タイトル下）へお願いします。メールアドレスがあれば、それもあわせてご記入ください。

ZAMENHOFA FESTO

2018 ザメンホフ祭

PROGRAMO

- 本の紹介
- 歌の紹介
- 単語ゲーム
- 紙芝居MEIKO
- 懇親会

昨年のザメンホフ祭のようす

2018年12月1日（土）　名古屋エスペラントセンター事務所

第一部　午後２時～５時

第二部　午後５時半～７時半（懇親会）⇦要予約11月25日まで

会費　第一部500円

　　第二部3500円（和食仕出・ワンドリンク付）

「本の紹介」「歌の紹介」をしてくださる方を募集しています。詳細は下記へ

申込み・問合せ先

山口　眞一：メール syam-z@wa2.so-net.ne.jp　電話／fax 052-807-1198

主催　名古屋エスペラントセンター　名古屋市東区葵一丁目26-10　ユニーブル新栄301号